神戸女学院大学論集　第61巻第1号　Kobe College Studies Vol. 61 No. 1 (June 2014)

哲人王と理想的な政治家

高　橋　雅　人

The Philosopher King and the Ideal Statesman

TAKAHASHI Masahito

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 教授
連絡先：高橋雅人　〒662-8505　西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科
m-takah@mail.kobe-c.ac.jp

要　旨

プラトンの『ポリティコス』と『国家』とはどのような関係にあるのだろうか。本論文はこの問いに答えるために、『ポリティコス』における理想的な政治家が『国家』における哲人王にではなくて、理想国の創設者に対応することを明らかにする。

『ポリティコス』と『国家』の関係がいかなるものであるかについては、そもそも関係を論じないもの（加藤）、異質であることを強調するもの（スコフィールド、チェリー）、同質であることを主張するもの（カーン）、といった解釈がなされてきた。1で筆者はこういった解釈を簡単に紹介し、2でそれらに対する批判を述べる。筆者の見るところ、加藤の解釈はアリストテレスの最善のポリスの在り方についての考え方を楽観的にとらえすぎているように思える。スコフィールドの解釈は理想国の創設者がどのように誕生するかをプラトンがなぜ論じていないことを見落としている。チェリーの解釈はエレアからの客人とソクラテスとの違いを強調しすぎる。確かにエレアからの客人は、哲人王を主張するソクラテスとは違って、哲学者と政治家とを区別する。しかしたとえ哲学者と政治家が区別されるのだとしても、同一人物が哲学的知と政治的知の両方を持つことを妨げるものではない。かくして筆者は最後の解釈を取るカーンの議論に賛成する。しかし、カーンの解釈にも批判すべき点はある。3で筆者はそれを述べ、自己の見解を明らかにする。カーンは理想的な政治家と哲人王を同一視するが、筆者はその解釈を取らない。なぜならば、理想的な政治家が法を超えた存在であるのに対して、哲人王は確かに法をつくる働きは持つが、しかし国家の根幹をなす重要な法はこれを決して変えないことが期待されているからである。『ポリティコス』における理想の政治家はむしろ理想国の「創設者」と同一視されるべきなのである。

キーワード：プラトン、『ポリティコス』、『国家』、政治家、哲人王

Summary

What is the relationship between the *Politicus* of Plato and the *Republic*? To answer this question, this paper clarifies that the ideal statesman in the *Politicus* does not correspond to the philosopher king but to the founder of the *Kallipolis* in the *Republic*.

There are three interpretations about the relationship between these two dialogues: the interpretation that never discusses this problem (Kato); the interpretation that emphasizes the differences of the *Politicus* from the *Repulic* (Schofield and Cherry); and the interpretation that insists on the similarities between the two (Kahn). I introduce their arguments briefly in section 1 and critique them in section 2. Kato's interpretation is too optimistic to grasp the true meaning of Aristotle's notion of the best *polis*. Schofield fails to see why Plato does not discuss how the founder of the *Kallipolis* will be born. Cherry emphasizes the difference of the Eleatic Stranger from Socrates too much. It is true that while Socrates advocates philosopher kings, the Eleatic Stranger distinguishes between philosophers and statesmen. But even if they should be distinguished in theory, it is possible that the one and the same person could have both philosophical and political knowledge. Thus, I basically agree with Kahn.

However, Kahn's interpretation must be criticized for several points. I argue these in section 3 and present my own interpretation. Kahn assumes some identity between the ideal statesman and the philosopher king. But I disagree on that point, because while the ideal statesman is a figure beyond laws, the philosopher king, having the ability to change some laws, is expected to guard the very fundamental laws of the *Kallipolis*. The ideal statesman should be regarded as the same person as the founder of the *Kallipolis*.

Keywords: Plato, the *Politicus*, the *Republic*, Statesman, Philosopher King

はじめに

『ソピステス』とともにプラトン後期対話篇の二大雄篇である『ポリティコス』が、プラトン政治哲学の一つの達成を示しているのには疑いがないが、しかしそれがいかなるものであるかについて明確に示すことは難しい。それは『ポリティコス』の統一的解釈に至るために越えられるべきハードルが、形式、内容、方法の三つのいずれにおいても高いからである。解釈の困難を思いつくままに挙げることが許されるならば、例えば、直ちに次のような問題が挙げられるだろう。形式について言えば、エレアからの客人と若いソクラテスの対話は本当の意味で対話であるのだろうか、という疑問がある。というのも、エレアからの客人の問いに対する若いソクラテスの返答が、ほとんどの場合、「はい」「いいえ」「どうしてそうでないことがありましょう」といったものであり、初期対話篇に見られるようなドラマティックな展開を生み出すようなものではないからである。『ポリティコス』と同じくエレアからの客人が対話を導く対話篇である『ソピステス』の冒頭[1]をみると、エレアからの客人が対話をしなければならない理由は必ずしもない。彼がひとりで長広舌をふるうのではなくて、対話で語るのを選んだのは、素直な人が答えるならば対話の方が楽であるからだった[2]。そうだとすると、対話の導き手、つまり問い手の意図を挫かないような人物が答え手に選ばれているのであるから、対話の展開が華々しくないのも仕方がないのかもしれない[3]。あるいは方法についていうならば、パラデイグマのパラデイグマを必要とする分割の方法[4]とは何なのだろうか。それは『ソピステス』の分割の方法と違うのだろうか、そして違うとしたらどのように違うのだろうか。あるいはまた内容についていえば、尺度についての議論や宇宙の回転が逆であったことがあるという神話は、この「政治家とは誰のことか」「政治術とは何か」を探求する対話篇の構成の中でどのように位置づけられるのか。そもそも神話はどのように解釈されるべきなのか[5]。まとめて言えば、この対話篇はいかなる仕方で統一的に解釈できるのだろうか。

これらはみな重要な問いである。しかし本論文が目指すのはこれらの問いに答えることではなくて――これらの問いにすべて答えるには論文では足りないだろう――、『国家』[6]と『法律』との間にその執筆年代がおかれる『ポリティコス』が、内容的にはどのような「間」にあるのかを解明すべく、『国家』と『ポリティコス』のそれぞれにおける求められる政治家の特

1) 『ソピステス』217c-218a。
2) また、その場にいたソクラテスらの要望を満たすためでもあった。
3) とはいえ、『ポリティコス』の政治家の定義探求は、一度、挫折し、議論を立て直すために神話が挿入される。そういった対話篇全体の構成の妙はあり、そこにこそプラトンの意図が隠されている。
4) 『ポリティコス』277d。
5) 神話を二つの時期に分ける伝統的な解釈と、それに異を唱え三つの時期に分けるロウやブリッソンの解釈がある。Cf. Rowe, 1995a; Brisson, 1995.
6) 近年、『国家』という訳は適切ではないと主張されているが、他に適訳があるわけでもないので、本論文では通常の『国家』という訳を採用する。cf. 納富（2012），196-214；加藤（2013），77-80。納富の議論に対する筆者の見解は、高橋（2013）に記した。

質性格を比較・考究しようとすることである。言うまでもなく、どのような「間」にあるのかを精確に定めることそのものも、三つの対話篇の把握が欠かせないがゆえに、きわめて大きな課題ではあるが、本論文ではそれを『国家』と『ポリティコス』という二つの対話篇の関係というただ一点に絞って考察したい。したがって、本論文の作業はより大きな課題の、すなわちプラトン後期対話篇における政治哲学の在り方を解明するという大きな課題の一部であるが、しかし小さくない一部である。

以下、1でこの問題に関する先行研究を紹介し、2でその批判を記す。その上で、3で自分の考えを述べていく。

1

『ポリティコス』の『国家』からの距離を計ろうとする本論文の目論みは、しかしながら、近年のプラトン研究の流れとはずれているのではないかという疑念が寄せられるかもしれない。なぜなら、国内においてプラトンの『国家』と『法律』、そしてアリストテレスの『政治学』を古典期ギリシアの政治哲学の三大著作として取り上げ、それぞれの固有性とそれら相互の関係を見ださめ、ギリシア政治哲学全体の構造を解き明かそうとする論考があるからである。加藤信朗による論考がそれである[7]。

「「理想国（ユートピア）」論への視座――三大著作の収斂点をめぐって――」と題されたこの論考は、プラトンの『国家』と『法律』、そしてアリストテレスの『政治学』という三つの著作の関連性を問うものである。タイトルが示す通り、この論考はプラトンとアリストテレスの共同体論（あるいはポリス論）の一致する点をめぐってのものであり、この問題に対する加藤の答えは、最善の市民共同体を目指すと言う点でプラトンの二著作とアリストテレスの『政治学』とは共通であるが、アリストテレスの著作がより客観的であるという点で異なっているというものである[8]。

目を国外に向けてみると、このような加藤の『ポリティコス』に言及しない立場に対して、『国家』と『ポリティコス』（さらには『法律』やアリストテレスの『政治学』）との関係を問うことがなされてきた。この問いに対する答えは、これらの著作の差異を強調するものと逆に連続性を強調する解釈とに分かれる。

まずその差異を強調する解釈として、マルコム・スコフィールドのそれが挙げられる[9]。すなわちスコフィールドによれば、この二つの著作はプラトンの意図として全く異なるものである。プラトンは『政治家』において政治に関する棟梁的知識（master knowledge）の確立を目指し成功した。しかしその知識を抽象的に扱っており、その知識を有している理想的な政治家がどのようにして作り出され、どのようにして国家の中に生じるかについては述べていない。それに対して、『国家』の哲人王はまさにそのことを問題にしているのである。確かに『法律』には哲人王はいない。しかし、『国家』と同じく『法律』においても「政治に最も携わりたくないと考えている人々にこそ政治権力を」という考えは見られるのであり、政治的生よりもよ

7）加藤信朗（2013），75-99。
8）加藤（2013），95。
9）Schofield,（2006）, 136-193.

りよい生――哲学的生――の存在が政治的生に対する躊躇を生む。その視点は、スコフィールドによれば、『政治家』には欠けているのである。

また、ケヴィン・M・チェリーの解釈も以下のように、できるだけ『ポリティコス』を『国家』から引き離す解釈である[10)]。それについて紹介する前に、触れておかなければならないのは、チェリーが前期・中期・後期という対話執筆年代の区分を前提としないということである。したがって、チェリーがソクラテスについて解釈するには、どの対話篇からもその素材を自由に用いることになる。例えばチェリーは『ソクラテスの弁明』や『ゴルギアス』において言われていることを、そのまま『国家』において言われていることと重ね合わせて理解する。このことについての私の考えは異なるが、今は、チェリーの前提を受け入れ、さまざまな対話篇においてソクラテスが語っていることは、すべて合わせて考察してよいということにしよう。

さてではこの前提の下で、チェリーはどのように『ポリティコス』をその他のソクラテスが主人公となっている対話篇から引き離すのであろうか。チェリーによれば、まずエレアからの客人の対話法とソクラテスの対話法との違いが顕著である。エレアからの客人は対話の相手の魂について考慮しないが、ソクラテスは魂の配慮こそ重要と説く。そしてこのことは、政治に関する考慮の場合にも影響を与える。ソクラテスは個人の徳を目指すのに対して、エレアからの客人は集団としての人間のみを扱い、しかもそれはその集団の生存のためにであって、徳のためにではない。そもそもエレアからの客人は、『ソピステス』の冒頭[11)]で述べているように、哲学者と政治家は明らかに違うと考えている。それに対してソクラテスは哲人王を唱えるのであって、これはつまり哲学者と政治家を同一視しているのである。以上の簡単な紹介によっても、『ポリティコス』が特異だとするチェリーの解釈が徹底的であることがわかるだろう[12)]。

以上のような『ポリティコス』の特異性を際立たせる解釈に対して、『ポリティコス』と『国家』（と『法律』）を統一的にかつ発展を見る解釈がカーンの解釈である[13)]。カーンによれば正しい政治とは何かという点ではプラトンは変化していない。真の政治家は法律の上位にある。しかし、実際にそのような人が現れるかどうかについては、プラトンはだんだんと悲観的になっていく。『国家』では、希望を持って語られていた哲人王の素質を持つ人の出現が、『政治家』ではかなり怪しくなり、『法律』では完全に捨てられて、法の支配が前面に打ち出されてくる。このカーンの考え方は、最近の論文でも変わっていない[14)]。そしてカーンは、賢明な政

10) Cherry, (2012)。特にその5章。

11) 『ソピステス』217b。

12) この観点から興味深いのは、チェリーが『ポリティコス』の最後のセリフを若いソクラテスに帰している点である。その理由としてチェリーが挙げるのは、第一に、言わば「エレアもの」と名付けられる対話篇の中で『パルメニデス』と『ソピステス』のどちらにおいても、若者のセリフで終わっている点である。すなわち、『パルメニデス』では若いアリストテレスが、そして『ソピステス』ではテアイテトスが述べているのである（とはいえこの点は、私にはそれほど説得的ではない。なぜなら『パルメニデス』と『ソピステス』では対話が終わっているだけであるが、『ポリティコス』では『ソピステス』と『ポリティコス』の二つの対話のまさに締めくくりとしてエレアからの客人への感謝が述べられているからである）。第二に、ソクラテスの哲学観や政治観からは、エレアからの客人のそれは隔たりすぎているので、エレアからの客人の見解に賛同しないはずだという点である。

13) Kahn, (1995).

14) Kahn, (2009).

治家と哲人王との間にある種の同一性を想定する[15]。以上がカーンの解釈である。

2

1では先行研究を概観したが、2ではこれらについての問題と考えるところを述べていきたい。

まず、加藤の論考に対してであるが、その問題設定からいえば、理想国よりもむしろ理想的政治家を言語によって彫琢しようとする『ポリティコス』がこの論考の中に含まれないのは理解できないことではない。しかしこの論考の中で加藤は『ピレボス』には触れているのであるから、『ポリティコス』が全く触れられていないのは、少々奇異な感じを受ける。またいささか逸脱するが、アリストテレスの『政治学』の扱いが楽観的であるように感じられる。それはこういうことである。

アリストテレスの『政治学』がプラトンの『国家』や『法律』の議論をふまえた上で批判していることは、『政治学』第二巻に明らかである。そこではアリストテレスは特に国家の一性をめぐって議論を展開し、プラトンの「妻子共有論」もこの観点から批判されている。これはアリストテレスの『政治学』が、「「自然本性（*anthropine physis*）」にもとづき、あるべき「最善のポリス共同体」を構想[16]」していることを示すだろう。しかしアリストテレスの場合、自然本性的に奴隷である人々の存在を認めていることはやはり問題であろう[17]。たとえアリストテレスの奴隷に対する考え方が時代制約的なものだとしてある程度は擁護しえたとしても、あるいはプラトンも奴隷の存在にそれほど疑いを持たなかったのだからこの点ではアリストテレスと共通だとみなしえたとしても、「最善のポリス共同体」に農民や職人をその部分として含まないとアリストテレスが主張している点は、プラトンの『国家』とは大いに異なり、より大きな問題であるように思われる。アリストテレスの考えでは、「一方農民と技工とすべての賃金労働者は国家にとって必要不可欠なものとしてあり、他方重装歩兵と政務を審議する者が国家の部分[18]」なのであって、農民は気概のない性格の奴隷、ないしペリオイコイが望ましい[19]。それに対して、プラトンの『国家』における「最善のポリス共同体」では、農民や職人など経済活動に従事する人々は「養育者」と呼ばれ、まぎれもないポリスの一員、すなわち自由市民である。彼らが奴隷とされる時こそ、「理想国」が「名誉支配制国家」へと転落するときなのである。したがって、アリストテレスの言う「最善のポリス共同体」は、プラトンの言う「名誉支配制国家」であるか、あるいはそれに類似したものとなるのではないだろうか[20]。

15）Kahn, (2009), 160.

16）加藤，(2013)，94。

17）もっともアリストテレスの奴隷論についてはより詳細な議論が必要である。

18）アリストテレス『政治学』第7巻第9章1329a35-38。牛田訳を使用した。

19）アリストテレス『政治学』第7巻第10章1330a25-30。

20）次のことを付け加えることが許されるだろうか。アリストテレスによれば、政治と軍事に携わる者は市民である。そして市民は裕福でなければならないという。他方で市民は生産活動に従事することはない。なぜなら政治に携わる余暇が必要だからである。では、彼らはどうして豊かであるのだろうか。その他の人々からの収奪によるのであろうか。――だがアリストテレスの考える「最善のポリス共同体」については、より丁寧な検討が必要なのは言うまでもない。

アリストテレスへの言及が長くなってしまったようだが、奴隷と自由市民の問題は、強制により支配されるのかそれとも自発性に基づいて支配されるのかという問題[21]につながっており、この区別が『ポリティコス』では僭主と政治家との区別に直結しているので、触れておくのも意味のないことではなかったであろう。

それでは、『ポリティコス』を『国家』（や『法律』）から異なるものとして解釈する人々にはどのような点が疑問として挙げられるだろうか。まず、スコフィールドに対しては、『ポリティコス』の議論が抽象的である点には同意するが、抽象的であるというだけで『ポリティコス』が『国家』から隔たっていると言えるだろうか。スコフィールドは『政治家』には政治的生に対する躊躇がないと述べていたが、『政治家』において法が制定されるのが理想的政治家本人の不在の時のためとされていることは、その政治家が政治から離れる可能性を示唆しており、それは『国家』における哲人王が洞窟の中から地上へと去って哲学をすることを思い起こさせる、と述べることはうがちすぎであろうか。たとえうがちすぎであろうとも、後で論ずるように、『政治家』における理想の政治家が『国家』における理想国の創設者だとするならば、そのような政治家がどのようにして誕生するかはそもそも『国家』でも論じられていない。

チェリーに対しては、ソクラテスとの対比を強調しすぎだと言いたい。チェリーは前期・中期・後期の区分を取らないが、『ゴルギアス』のソクラテスと『国家』のソクラテスとでは視点が違うことは認めざるを得ないだろう。「ゴルギアス」でソクラテスが語る「政治的なこと」というのは確かにエレンコスに基づく一対一の哲学的対話活動を指すが、『国家』においては単に一対一の対話という視点のみならず、共同体全体を論じる視点があり、これはむしろ『政治家』と共通している。すなわち、立法者は国家全体の幸福を考慮すべきであり、国家の一部の人々の幸福を優先的に考慮すべきではない。また、哲学者と政治家とは異なるとエレアからの客人が述べているのは確かだが、しかしこのことは、ある人が同時に哲学者と政治家であることを妨げるわけではない。さらにまた、政治的技術が哲学とは異なるとしても、そのことは前者が後者によって支えられる可能性を排除しない。

最後に、『ポリティコス』と『国家』との間に連続性を認めるカーンの解釈についてであるが、今まで述べてきたところからお分かりいただけるように、筆者は基本的に賛成する。すなわち、『ポリティコス』は『国家』と同じくプラトンの理想的な政治について語っており、優れた政治家が法を超えた存在であるという点も共通している。しかしカーンは哲人王がそのような優れた理想の政治家と考えているが、この点に関して筆者は同意できない。なぜなら哲人王はそのような法を超えた存在ではないと考えられるからである。主にこの点を3において論じたい。

3

カーンの解釈の批判に入る前に、『国家』と『ポリティコス』との親近性について神話を手掛かりに述べておきたい。どちらの対話篇においても、「神が人間の世話をするのではなくて、人間が人間の世話をする」ということに関して、神話が重要な役割を果たしているからである。

21）『ポリティコス』276d-e。

『国家』第十巻の「エルの神話」で語られることの中で、印象的なのは魂による生の選択というモチーフだろう。魂は単に輪廻転生するのではなくて、自らの生のタイプを選んでこの世で新たな身体をまとい、出現するのである。魂による生の選択の際、神々が関与しないことである。端的に言えば、神々は見ているだけで、人間を救わない。魂はただ自分だけで選択をし、その責任を自らに負う。まさに「神に責めなし。責めは選ぶものにあり[22]」である。

同じように『ポリティコス』の神話においても、神は人間の世話をしない。というよりも正確に述べるならば、かつて神が直接人間の飼育をしていた「クロノスの時代」があったが、今はそのような時代ではないので、人間が家畜を飼育するように神が人間を飼育するというモデルで政治家を考察してはならず、あくまで人間が人間の世話をするという視点から逸れずに政治家を考察しなければならない、これが「政治家とは何かの探究」が頓挫してしまった後に、エレアからの客人が神話を通して明らかにすることなのである。すなわち神はここでも人間を助けないと言えよう[23]。人間はあくまで自らを導いていかなければならないのである。

このように人間が人間の世話をするというプラトンの基本的な政治への視座に対して、当然提出されるだろう疑問は、『ポリティコス』においても『国家』においても支配者は被支配者に比べて格段に優れているのであり、その度合いは支配者を「神に比すべき」なのではないかということである。哲人王の素質を持って生まれる人間の数たるやきわめてわずかであるし、もし『ポリティコス』で語られる理想的な政治家が哲人王に比定されるのであれば、そのような政治家の数も極めて微小であろう。また、『国家』の哲人王たちは、実は「家畜を飼育する人間」とも考えられるのではないだろうか。というのも、『国家』における結婚の在り方がまさにそのようなイメージで語られるからである。

この点を詳しく見てみよう。『国家』においてソクラテスはできる限り優秀な子供が生まれるように、できる限り優秀な男女を結婚させるべきであると語る。しかし、そのことを当の男女に悟られないようカップリングは偶然のものだと装うために、巧妙な籤を考案すべきだと提案する。その文脈でソクラテスは猟犬や鳥を例に出し、人間においてもそうすべきだとするのである。このことはまさに「人間が家畜を飼育する」のと同じ構造ではないだろうか。

この策略において、表では籤をつくり、裏では男女のカップリングを行うのは守護者であり、結婚する（させられる）のは補助者であることは、結婚の年齢の記述と教育プログラムとを対照することで明らかになる。まず結婚に関しては、男性は25歳から55歳、女性は20歳から40歳である[24]。これに対して、教育期間は20歳から時折の軍務経験をしながら数学を学び、30歳か

22）『国家』617e。

23）しかし「神が人間を助けない」というのが、プラトンの考える神と人との関係なのかと言えば、これは大いに異論が出されよう。善き人には善いことのみが生ずるのであって、神々によってないがしろにされることはないということは、『弁明』の末尾や『国家』第10巻で（612e-613a）言われているのである。したがって、神と人との関係をプラトンが最終的にどのように考えたかは、また別の問題であり、この点については筆者は『法律』第十巻の神々は人間に配慮をするといういわゆる「神義論」において考察すべきであると考えている。

24）『国家』460d-e。

らの5年間が論理的訓練の期間とされる[25]。35歳から軍務などの実務経験を積み、50歳からいよいよ哲学を学び始め、最大の学業である善のイデアを学ぶ。それを学び終わった後、哲人王たちは順番に「洞窟へ帰還」して、政治に携わることになる。したがって、この教育プログラムから明らかなように、真の意味での支配者、つまり哲人王（守護者）は、50歳を超えていることになる。善のイデアを学び終わるのに何年かかるかは明記されていないのではっきりしたことは言えないが、男性の場合には結婚が許される55歳までの数年間と重なることがありうるかもしれない。しかし結婚に関する巧妙な籤をつくる人たちは、自らは結婚する可能性のない人たちだとするのが自然であろう。それゆえ結婚に関する限り、『国家』の守護者たちは補助者たちに対して「人間の家畜に対する飼育」をしているということになるのではないだろうか。そして『ポリティコス』の理想の政治家が『国家』における哲人王に比定されるのであれば、そのような政治家にも「人間の家畜に対する飼育」を期待しているのではないだろうか。

以上のような疑問ないし反論に対しては、次のように答えたい。『国家』の哲人王あるいは守護者が、少なくとも補助者たちの結婚に関して「人間の家畜に対する飼育」をしているとみなすことは、テキストのメタファーがある限り正当である。しかし小さなことではあるが、そのことから「神の人間に対する飼育」を哲人王が被支配者に行うと推論してはならない。なぜなら第一に、『政治家』の神話で語られたクロノスの時代のような「神の人間に対する飼育」は、人間の生活全般にわたっているのであって、『国家』の守護者のように補助者の結婚に限られていない[26]。そして守護者たちは「より良き出生とより悪しき出生を支配する幾何学的な数[27]」をぴたりと把握することが永続的にはできない。これは神ならぬ人間であるがゆえのことであろう。言うまでもなく、このミスが理想国の崩壊を導くことになるのである。

だがより大きな問題は、そもそもカーンの言うように、『ポリティコス』の理想の政治家が『国家』の哲人王に同一視されてよいかどうかということである。そしてこれは否定しなければならないのである。というのも両者の法に対するあり方が異なるからである。『ポリティコス』における理想の政治家にとって法とは破棄してもよいものだった。ところが、『国家』における哲人王は、すなわち守護者でもあり、そして守護者は実は法の守護者でもあるのである。確かに彼らも法律を作ると言われていて、その限りにおいて法を超えた存在であると言えよう。そしてその超越は知識に基づくのは言うまでもない。しかしながら、彼ら守護者については、「言うに足るほどの重要な法律をいじって改悪すること」はないと断言されているのである[28]。ここで言われている重要な法律とは、理想国を言葉のうちに造り上げているソクラテスやグラウコンら「立法者」の立てた根本的な法、つまり支配者たちの私有財産禁止、妻子共有、のことに他ならない。言い換えれば、哲人王あるいは守護者たちは、ソクラテスら立法者の下

25) これはおそらくは哲人王たちの営む哲学的対話の答え手になると思われる。プラトンの対話篇、特に中期・後期の対話篇が示しているように、問い手と答え手には年齢差があり、対話をリードする問い手が年長であるのが、哲学的対話の一つの特徴であるからである。

26) これに対して『ポリティコス』における政治家が取り組む勇気ある血筋の人々と節度ある血筋の人々との結婚は、全市民に及ぶように思われる。

27) 『国家』546c-d。

28) 『国家』445e。訳は藤沢訳による。

にいるのである。このような従属的要素は『ポリティコス』の理想の政治家にはない。彼はまさに知識を備えた、法をも超える存在なのである。

ではこのような政治家と同一視されるべき存在は『国家』の中にはいないのだろうか。いや、それこそ『国家』第七巻末尾[29]に現れ、「理想国」を創り上げようと奮闘する「創設者」――と仮に呼んでおく――に他ならない。創設者と哲人王とはどちらも同じく善のイデアを学んでいるという点では同じだが、哲人王が洞窟に帰還し政治に携わるのは、自らを育て上げてくれた国家に正しいことを返すためであるのに対して、創設者は自発的に理想国を創りはじめるという点で大きく異なっている。したがって彼は、造りだされる理想国の内に生じなければならない哲人王が財産や妻子に関してどのような人間であるべきか、知識に基づき法を定めるのである。この点で、すなわち知識に基づき国家の根幹をなす方を定めるという点で、創設者と理想の政治家とは同じなのではないだろうか。

善き国家を造るための下準備の点でも彼ら二人は同じような行動をとる。創設者は理想国を造りはじめる際、10歳以下の子供だけを親や兄弟、社会から引き離し、教育をしていく。同じように理想的な政治家は国家にふさわしくない子供を死に至らしめたり、国外に追放したりし、知能の劣った子供たちは奴隷とすると言われている[30]。こちらの方がより苛烈だが、主旨はどちらも善き国家を造るための素材選びの重要性を説いているものである。

そしてまた創設者も理想の政治家も、どのように誕生するかについて、全くプラトンが沈黙を守っているという点でも同じである。哲人王を育てるプログラムは『国家』において語られた。能力に関しては哲人王と同じものが創設者にも要請されるはずだが――そして理想的な政治家についても同じだろう――、しかし自発性に関しては大いに異なる。理想国の中で育てられた哲人王が理想国を維持しようとするのは正しいこととして要請されている。しかし創設者と理想の政治家は、どうして善き共同体を創り上げようと意志するに至るのであろうか。それが解明された時、初めて理想国の実現可能性について明確になるだろう。だが、このことこそプラトンが決して語らなかったことなのである。

参考文献

アリストテレス（牛田徳子訳）（2001）『政治学』京都大学学術出版会

Brisson, Luc, (1995), 'Interpretation du mythe du *Politique*', in Rowe (1995), 349-363.

Cherry, Kevin M., (2012), *Plato, Aristotle, and the Purpose of Politics*, Cambridge University Press, Cambridge.

Kahn, C. H., (1995), 'The Place of the Statesman in Plato's Later Works', in Rowe (1995), 49-60.

――――, (2009), 'The Myth of the Statesman', in Catalin Partenie, ed., *Plato's Myth*, Cambridge University Press, Cambridge.

加藤信朗（2013）『平和なる共生の世界秩序を求めて』知泉書館

納富信留（2012）『プラトン　理想国の現在』慶応義塾大学出版会

プラトン（藤沢令夫訳）（1979）『国家（上）』岩波文庫

Rowe, C. J., ed., (1995), *Reading the Statesman*, Academia Verlag, Sankt Augustin.

Schofield, Malcolm, (2006), *Plato*, Oxford University Press, Oxford.

29）540e-541a.

30）『ポリティコス』309。

高橋雅人（2013）「納冨信留著『プラトン　理想国の現在』（慶応義塾大学出版会、二〇一二年）を読む」『ペディラヴィウム』第68号、41-52.

付記

本論文は平成23～26年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）「プラトン後期対話篇における問答法と倫理的・政治的知のあり方」（課題番号「23520047」）の研究成果の一部である。

（原稿受理日　2014年３月３日）